

[B年] 聖霊降臨節第17主日(2022年9月25日)

【旧約聖書日課】申命記 15章1～11節

1 七年目ごとに負債を免除しなさい。2 負債免除のしかたは次のとおりである。だれでも隣人に貸した者は皆、負債を免除しなければならない。同胞である隣人から取り立ててはならない。主が負債の免除の布告をされたからである。3 外国人からは取り立ててもよいが、同胞である場合は負債を免除しなければならない。4 あなたの神、主は、あなたに嗣業として与える土地において、必ずあなたを祝福されるから、貧しい者はいなくなるが、5 そのために、あなたはあなたの神、主の御声に必ず聞き従い、今日あなたに命じるこの戒めをすべて忠実に守りなさい。6 あなたに告げたとおり、あなたの神、主はあなたを祝福されるから、多くの国民に貸すようになるが、借りることはないであろう。多くの国民を支配するようになるが、支配されることはないであろう。

7 あなたの神、主が与えられる土地で、どこかの町に貧しい同胞が一人でもいるならば、その貧しい同胞に対して心をかたくなにせず、手を閉ざすことなく、8 彼に手を大きく開いて、必要とするものを十分に貸し与えなさい。9 「七年目の負債免除の年が近づいた」と、よこしまな考えを持って、貧しい同胞を見捨て、物を断ることのないように注意しなさい。その同胞があなたを主に訴えるならば、あなたは罪に問われよう。10 彼に必ず与えなさい。また与えるとき、心に未練があってはならない。このことのために、あなたの神、主はあなたの手の働きすべてを祝福して下さる。11 この国から貧しい者がいなくなることはないであろう。それゆえ、わたしはあなたに命じる。この国に住む同胞のうち、生活に苦しむ貧しい者に手を大きく聞きなさい。

【使徒書日課】

コリントの信徒への手紙二 9章6～15節

6 つまり、こういうことです。惜しんでわずかしが種を蒔かない者は、刈り入れもわずかで、惜しまず豊かに蒔く人は、刈り入れも豊かなのです。7 各自、不承不承ではなく、強制されてでもなく、こうしようと心に決めたとおりにしなさい。喜んで与える人を神は愛して下さるからです。8 神は、あなたがたがいつもすべての点ですべてのものに十分で、あらゆる善い業に満ちあふれるように、あらゆる恵みをあなたがたに満ちあふれさせることがおできになります。

9 「彼は惜しみなく分け与え、貧しい人に施した。

彼の慈しみは永遠に続く」

と書いてあるとおりです。10 種を蒔く人に種を与え、パンを糧としてお与えになる方は、あなたがたに種を与えて、それを増やし、あなたがたの慈しみが結ぶ実を成長させてくださいます。11 あなたがたはすべてのことに富む者とされて惜しまず施すようになり、その施しは、わたしたちを通じて神に対する感謝の念を引き出します。12 なぜなら、この奉仕の働きは、聖なる者たちの不足しているものを補うばかりでなく、神に対する多くの感謝を通してますます盛んになるからです。13 この奉仕の業が実際に行われた結果として、彼らは、あなたがたがキリストの福音を従順に公言していること、また、自分たちや他のすべての人々に惜しまず施しを分けてくれることで、神をほめたたえます。14 更に、彼らはあなたがたに与えられた神のこの上なくすばらしい恵みを見て、あなたがたを慕い、あなたがたのために祈るのです。15 言葉では言い尽くせない贈り物について神に感謝します。

【福音書日課】マルコによる福音書 14章1～9節

1 さて、逾越祭と除酵祭の二日前になった。祭司長たちや律法学者たちは、なんとか計略を用いてイエスを捕らえて殺そうと考えていた。2 彼らは、「民衆が騒ぎだすといけないから、祭りの間はやめておこう」と言っていた。

3 イエスがベタニアで重い皮膚病の人シモンの家において、食事の席に着いておられたとき、一人の女が、純粋で非常に高価なナルドの香油の入った石膏の壺を持って来て、それを壊し、香油をイエスの頭に注ぎかけた。4 そこにいた人の何人かが、憤慨して互いに言った。「なぜ、こんなに香油を無駄遣いしたのか。5 この香油は三百デナリオン以上に売って、貧しい人々に施すことができたのに。」そして、彼女を厳しくとがめた。6 イエスは言われた。「するままにさせておきなさい。なぜ、この人を困らせるのか。わたしに良いことをしてくれたのだ。7 貧しい人々はいつもあなたがたと一緒にいるから、したいときに良いことをしてやれる。しかし、わたしはいつも一緒にいるわけではない。8 この人はできるかぎりのことをした。つまり、前もってわたしの体に香油を注ぎ、埋葬の準備をしてくれた。9 はつきり言うておく。世界中どこでも、福音が宣べ伝えられる所では、この人のしたことも記念として語り伝えられるだろう。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

申命記 15章1～11節

1あなたは七年のおわりごとに負債を免除しなければならぬ。2免除のしかたは次のとおりである。すべての貸し主は隣人に貸したものを免除しなければならない。隣人や同胞から取り立ててはならない。主が負債免除を告知されたからである。3外国人からは取り立ててもよいが、同胞があなたに負っている負債は免除しなければならない。4あなたの神、主が相続地としてあなたに所有させる地で、主は必ずあなたを祝福されるから、あなたの中に貧しい者は一人もいなくなるであろう。5ただ、そのためには、あなたは、あなたの神、主の声に必ず聞き従い、今日あなたに命じる戒めをすべて行わなければならない。6あなたの神、主は、あなたに告げられたとおりあなたを祝福されるから、あなたは多くの国民に貸すようになり、借りることはない。また、多くの国民を支配するようになるが、支配されることはない。

7あなたの神、主が与えられた地のどこかの町で、あなたの兄弟の一人が貧しいなら、あなたは、その貧しい兄弟に対して心を閉ざし、手をこまぬいてはならない。8彼に向かって手を大きく広げ、必要なものを十分に貸し与えなさい。9あなたは心によこしまなことを抱き、「七年目の負債免除の年が近づいた」と言って貧しい同胞に物惜しみをし、彼に何も与えないことのないよう気をつけなさい。彼があなたのことで主に訴えると、あなたは罪に問われることになる。10彼に惜しみなく与えなさい。与えるときに惜しんではならない。そのことで、あなたの神、主は、あなたのすべての働きとあなたのすべての手の業を祝福してくださる。11この地から貧しい者がいなくなることはないので、私はあなたに命じる。この地に住むあなたの同胞、苦しむ者、貧しい者にあなたの手を大きく広げなさい。

コリントの信徒への手紙二 9章6～15節

6つまり、こういうことです。惜しんで僅かに蒔く者は、僅かに刈り取り、豊かに〔別訳→祝福して〕蒔く者は、豊かに刈り取るのです。7各自、いやいやながらではなく、強いられてでもなく、心に決めたとおりにしなさい。喜んで与える人を神は愛してくださるからです。8神は、あらゆる恵みをあなたがたに満ち溢れさせることがおできになります。こうして、あなたがたは常にすべてのこ

とに自足して、あらゆる善い業に満ち溢れる者となるのです。

9「彼は貧しい者に惜しみなく分け与え

その義は永遠に続く」

と書いてあるとおりです。10蒔く人に種と食べるパンを備えてくださる方は、あなたがたに種を備え、それを増やし、あなたがたの義の実を増し加えてくださいます。11あなたがたはすべての点で豊かにされて真心溢れる者となり、その真心が、私たちを通して神への感謝の念を抱かせることになるのです。12なぜなら、この奉仕の業は、聖なる者たちの欠乏を補うだけでなく、神への多くの感謝〔別訳→多くの人の感謝〕で満ち溢れるものになるからです。13この奉仕の業を通して、彼らは、あなたがたがキリストの福音を従順に告白していること、また、自分たちや他のすべての人々と真心から交わっていることを確かに知って、神を崇めるでしょう。14さらに、彼らはあなたがたに与えられた極めて豊かな神の恵みを見て、あなたがたを慕い、あなたがたのために祈るようになるのです。15言葉では言い尽くせない賜物のゆえに、神に感謝します。

マルコによる福音書 14章1～9節

1さて、過越祭と除酵祭の二日前になった。祭司長たちや律法学者たちは、どのようにイエスをだまして捕らえ、殺そうかと謀っていた。2彼らは、「祭りの間はやめておこう。民衆が騒ぎ出すといけないから」と話していた。

3イエスがベタニアで、規定の病を患っているシモンの家において、食事の席に着いておられたとき、一人の女が、純粋で非常に高価なナルドの香油の入った石膏の壺を持って来て、その壺を壊し、香油をイエスの頭に注ぎかけた。4すると、ある人々が憤慨して互いに言った。「何のために香油をこんなに無駄にするのか。5この香油は三百デナリオン以上に売って、貧しい人々に施すことができたのに。」そして、彼女を厳しくとがめた。6イエスは言われた。「するままにさせておきなさい。なぜ、この人を困らせるのか。私に良いことをしてくれたのだ。7貧しい人々はいつもあなたがたと一緒にいるから、したいときに良いことをしてやる。しかし、私はいつも一緒にいるわけではない。8この人はできるかぎりのことをした。つまり、前もって私の体に香油を注ぎ、埋葬の準備をしてくれた。9よく言うておく。世界中どこでも、福音が宣べ伝えられる所では、この人のしたことも記念として語り伝えられるだろう。」

黙想のためのノート

次主日教会暦と聖書日課について

・9月25日「聖霊降臨節第17主日」の日課主題は「奉仕する共同体」。

・旧約聖書日課は、「申命記」から、「七年ごとの負債免除規定」の箇所。使徒書日課は、「コリントの信徒への手紙二」から、献金についての教えを記す章句の一部。福音書日課は、「マルコによる福音書」から、「ナルドの香油」の逸話の箇所。

旧約日課(申命記 15章より)

・「申命記」は、ユダヤ正典「律法」の第五の書で、「出エジプト記」から始まる「モーセ物語」の完結部を構成する。エジプトから導き出し、40年にわたってイスラエルの荒れ野の旅に伴ったモーセが自身の死期を前にして、これまでの旅の歩みを振り返り、かつてシナイ山で授与された「律法」の意義を教え、「掟と法」を再提示する訣別説教の形式でまとめられた部分を中心を構成する。聖書学者は「申命記」の元となった「原申命記」があったと想定しており、これが前7世紀の南王国ヨシヤ王のもとで進められた改革の端緒として伝えられる神殿修繕工事に際して発見された古い「律法の書」(王下 22:8)と考えられてきた。つまり、ヨシヤ王の改革の中心的な担い手となった祭司・預言者グループは、これ以後、「申命記史観」とも呼ばれる王国神学を主唱してダビデ王家に伴い、ヨシヤ王没後から王国滅亡までの不遇時代やバビロン捕囚時代を乗り越えて、ペルシア支配時代の訪れとともに始まったユダヤ帰還、ユダ＝イスラエル共同体再建の中心的担い手として正典「律法と預言者」編纂にまでつながる伝統継承集団として続いた、と推認されている。このような経緯から、正典における「申命記」は、正典に神学的枠組みを与える神学思想の主要な柱の一つと考えられている。

・日課箇所は、12章から始まる「掟と法」の一部で、「七年ごとの負債免除規定」。ここで定められるような規定は、「原申命記」由来のもの、つまりヨシヤ王の改革に際する布告の典拠律法であり、ヨシヤ王時代の社会事情を反映しているとみなす考えが一般的であるが、仮定に基づく推論で根拠は薄弱である。関連する規定として、「七年目の休閑地規定」(出エジプト 23:10~11)および「ヨベルの年の規定」(レビ記 25章)が知られる。「ヨベルの年の規定」は「七年目の休閑地規定」を前提としており、「七年ごとの負債免除規定」を実際に適用可能な規定とするために「七年目の休閑地規定」という古い規定を根拠に「ヨベルの年の規定」を設けたのではないか、という推論も提案されている。これらの推論が提案される前提として、聖書学者らは、「七年ごとの負債免除規定」がヨシヤ王による改革で進められた人道的社会政策の一環である、という仮説に立っている。しかし、そのような見立ては、正典編纂時の神学的立ち位置に沿ったものである。

・「七年目の負債免除規定」がいずれかの時点で実際に布告されたものであるとすれば、それは、経済的成功によって不在大地主となっていたような富裕な地方有力者らに対する圧力あるいは牽制のためのものであつただろう。ヨシヤ王の改革は、前8世紀中葉のアッシリア帝国の衰退に伴う支配権力の間隙を縫って、旧北王国領域をユダ王国支配下に置こうという政治目的を伴っていた。従来、旧北王国領域は、「十部族」に由来すると見られてきたように、有力な地方聖所を中核とする地方権力(地方豪族)が散在していた。一方、「列王記」の伝えるヨシヤ王の改革は、その地方権力の権威の源泉とも言える地方聖所を廃止し、中央聖所であるエルサレム神殿に祭儀を集中させるためのものとして描かれている。その際、地方聖所に属する地方祭司らの一部は中央聖所エルサレム神殿の祭司団に編入することで反対を抑え込んだと考えられ、その代表例が預言者エゼキヤである。一方、地方豪族ら地方の富裕な有力者らに対しては、「鉛と鞭」を使い分けて支配下に組み入れる方途が取られたであろう。もっとも、ヨシヤ王の改革は王の戦死によって途中で挫折しており、ここで述べたような政策が実際に取られた可能性は極めて低いと考えられる。しかし、実際に実施されなかったからこそ、ある意味で理想主義的な規定がそのまま保存されて、後年の正典編纂時まで保持されたとも考えられる。

・この規定の神学的根拠は、「神の嗣業の土地に対する不可触性」にあり、アブラハムに対する「土地取得の約束」を法源とした建付けになっている。一方、貧しい者や弱者に対する社会的救済の責任という発想は、モーセの導いたイスラエルの民に「マナ」が与えられたというような逸話伝承に遡ることができる。

使徒書日課(Ⅱコリント 9章より)

・「コリントの信徒への手紙二」は、「パウロ書簡集」の第三に置かれた書簡文書で、使徒パウロが自ら創建に携わったアカイア州(ギリシア)コリントの教会に宛てて記した一連の書簡の中の一つ。「手紙一」が、この教会に宛てて送られた一連の書簡の初期のものであるのに対して、「手紙二」は、後期のものと考えられる。ただし、「手紙二」は、後期に送られた複数の書簡が一つにまとめられているとみなす聖書学者もいる。日課箇所を含む8~9章も、前後の文脈との整合性から、別の書簡から組み入れたものと見る場合がある。・日課箇所は、8~9章で集中的に「献金」についての教えが記されている中の一部である。この「献金」の教えは、端的には、「エルサレムの聖なる者たちのための募金」に関連するパウロの考えの説明である。エルサレム教会のための募金は、パウロがバルナバ宣教団から独立して宣教した先の教会共同体で一貫して呼びかけ、パウロ自身が取りまとめてエルサレムに届けたものである。日課箇所を含む9章は、より一般原則としての「献金」の教えとして記されている。

福音書日課(マルコ 14 章より)

・日課箇所は、「香油注ぎの逸話」として知られる箇所
で、四福音書で同様の逸話が伝えられているが、福音書によって設定や描写に違いがみられる。「マタイ」と「マルコ」は、伝承逸話としての構成はほぼ一致しており、エルサレムにおける受難物語の枠組みの中で主イエスを殺す計略にユダが関与していく過程の中に位置を与えられている。「ヨハネ」も、伝承逸話としての構成はほぼ一致しているが、「エルサレム入城」の逸話から始まる受難物語に先行する「ラザロの復活伝承物語」に組み込む構成となっている。「ルカ」は、受難物語とは完全に切り離し、ガリラヤ宣教時代の出来事として構成し、独自の意義づけを与えている。

・日課箇所を受難物語と結びつける「マタイ」、「マルコ」および「ヨハネ」に共通する視点は、この逸話における「香油注ぎ」が「葬りの準備」であるという理解で、主イエスご自身の見解として物語られている。「葬り」に「油」や「香料」が用いられていたことは、主イエスの葬りと復活を伝える逸話伝承でも描かれている(マルコ 16:1)。ただし、死者の葬りに際して油や香料が用いられたのは、死者への敬意と腐臭防止のためであったと考えられ、油はおそらく全身に塗られた。一方、日課箇所の逸話で、「香油」は主イエスの頭から注がれており、いわゆる「油注ぎ」、つまり「メシア＝キリスト」として神に選ばれたことを宣するに際して行われた儀式を示唆するものである。

・1 世紀当時のユダヤ教における「メシア」観は一様ではない。そもそも、「旧約」において「油注ぎ」は、「祭司」の任職儀式として規定されているほかは、「王」や「預言者」の選びの物語の中で随時、象徴的に現れてくるもので、「油注がれた者」としての「メシア」の役割に具体的な方向性が与えられているわけではない。正典「諸書」に現れてくるような終末的「メシア」観が 1 世紀当時のユダヤ教で大きな影響を与えていたとも言われるが、一方で、熱心党のような過激な民族主義武装集団がユダヤ民族国家の独立を謳って武装蜂起すればその指導者が「メシア」と呼ばれるのが、前 2 世紀のマカベア独立戦争以来、一般的であった。

来週の誕生日 (9 月 25 日～10 月 1 日)

主日礼拝の讃美歌から

・21-8 番「心の底より」(= I 26 番「こころを傾け」)は、16 世紀宗教改革の時代にプロテスタント陣営の傭兵として生きたゲオルグ・ニーゲがルターの「朝の祝福の祈り」に触発されて作詞したとされる「朝の讃美歌」。曲は、民謡の旋律からの編曲。

・21-419 番「さあ、共に生きよう」は、ドイツで毎年行われている全国信徒大会 1983 年大会のために編纂された讃美歌集『いのちに立ち返ろう』から採用された讃美歌。

・21-567 番「ナルドの香油」(= I 391「ナルドの壺」)は、19-20 世紀米国の会衆派牧師パーカーの作詞作曲。パーカーが説教後の讃美歌として自作。20 世紀後半以降の英語讃美歌では採用されていない。

21-8「心の底より」

Aus meines Herzens Grunde

1. Aus meines Herzens Grunde / sag ich dir Lob und Dank / in dieser Morgenstunde, / dazu mein Leben lang, / dir, Gott, in deinem Thron, / zu Lob und Preis und Ehren / durch Christus, unsern Herren, / dein eingebornen Sohn,
2. dass du mich hast aus Gnaden / in der vergangnen Nacht / vor G fahr und allem Schaden / behütet und bewacht. / Demütig bitt ich dich, / wollst mir mein Sünd vergeben, / womit in diesem Leben / ich hab erzürnet dich.
3. Du wollest auch behüten / mich gnädig diesen Tag / vors Teufels List und Wüten, / vor Sünden und vor Schmach, / vor Feuer und Wassersnot, / vor Armut und vor Schanden, / vor Ketten und vor Banden, / vor bösem schnellem Tod.
4. Gott will ich lassen raten, / denn er all Ding vermag. / Er segne meine Taten / an diesem neuen Tag; / ihm hab ich heimgestellt / mein Leib, mein Seel, mein Leben / und was er sonst gegeben; / er machs, wies ihm gefällt.
5. Darauf so sprech ich Amen / und zweifle nicht daran. / Gott wird es alls zusammen / in Gnaden sehen an; / und streck nun aus mein Hand, / greif an das Werk mit Freuden, / dazu mich Gott beschieden / in mein Beruf und Stand.

21-419「さあ、共に生きよう」

Damit aus Fremden Freunde werden

1. Damit aus Fremden Freunde werden, / kommst du als Mensch in unsre Zeit; / Du gehst den Weg durch Leid und Armut, / damit die Botschaft uns erreicht.
2. Damit aus Fremden Freunde werden, / gehst du als Bruder durch das Land, / beegnest uns in allen Rassen / und machst die Menschlichkeit bekannt.
3. Damit aus Fremden Freunde werden, / lebst du die Liebe bis zum Tod. / Du zeigst den neuen Weg des Friedens, / das sei uns Auftrag und Gebot.
4. Damit aus Fremden Freunde werden, / schenkst du uns Lebensglück und Brot: / Du willst damit den Menschen helfen, / retten aus aller Hungersnot.
5. Damit aus Fremden Freunde werden, / vertraust du uns die Schöpfung an; / Du formst den Menschen dir zum Bilde, / mit dir er sie bewahren kann.
6. Damit aus Fremden Freunde werden, / gibst du uns deinen Heiligen Geist, / der, trotz der vielen Völker Grenzen, / den Weg zur Einigkeit uns weist.

21-567「ナルドの香油」

Master, No Offering

1. Master, no offering, / Costly and sweet, / May we, like Magdalene, / Lay at Thy feet; / Yet may love's incense rise, / Sweeter than sacrifice, / Dear Lord, to Thee. / Dear Lord, to Thee.
2. Daily our lives would show / Weakness made strong, / Toilsome and gloomy ways / Brightened with song; / Some deeds of kindness done, / Some souls by patience won, / Dear Lord, to Thee. / Dear Lord, to Thee.
3. Some word of hope, for hearts / Burdened with fears, / Some balm of peace, for eyes / Blinded with tears, / Some dews of mercy shed, / Some wayward footstep led, / Dear Lord, to Thee. / Dear Lord, to Thee.
4. Thus, in thy service, Lord, / Till eventide / Closes the day of life, / May we abide! / And when earth's labors cease, / Bid us depart in peace, / Dear Lord, to Thee. / Dear Lord, to Thee.